

The Japanese Onco-Cardiology Society

日本腫瘍循環器学会

会報



目次

● 理事長挨拶	1
● GCOS2027 Tokyo 開催について	2
● 第9回(2026年)学術集会開催のお知らせ	3
● 第8回(2025年)学術集会開催のご報告	5
● 学会報告	
【総務】	
2026年度(第9期)定時社員総会兼評議員会議事録	6
【国際交流】	
南アフリカでの GCOS2025 を終えて	9
【国内交流】	
日本臨床薬理学会：第46回学術集会	
ジョイントシンポジウム	10
● 施設紹介	
利根中央病院	11
NTT 東日本関東病院	12
● 学会委員会紹介	
学術委員会の活動について	13
● JOCS-NEXT の歩みと切り拓く未来	14
● 役員名簿	
● 編集後記	



一般社団法人
日本腫瘍循環器学会
<http://j-onco-cardiology.or.jp>

理事長挨拶

一般社団法人 日本腫瘍循環器学会
理事長 南 博信
(神戸大学大学院医学研究科腫瘍・血液内科)

2017年に小室一成先生が、がん及びがん治療に関連した心血管系の問題を領域横断的に議論するプラットフォームとして本学会を設立し、翌年には第1回学術集会在開催されました。以後、本学会の趣旨に賛同する入会者が増え、個人会員は978名となり、学術集会参加者も600名を超えました。これは腫瘍循環器学の重要性が認識されてきたことを反映しており、うれしく思います。

本学会では研究や教育のため、会員の皆様が積極的に外部資金を獲得していただいています。2021年にはPfizer社の公募型助成金「がん患者における合併症としての静脈血栓症における認知を向上させるための教育プロジェクト」を、今年は「がん治療による心血管合併症に関する疫学的基盤研究」で公益財団法人小林がん学術振興会の助成金を獲得していただきました。本会の若い会員の活動が盛んなこともうれしく思います。若手のグループとしてJOCS-NEXTが2025年に発足し、若手の議論から研究さらには論文アクセプトにいたっています。本学会の将来は安泰に思います。

昨年度は多く情報発信しました。10月の第8回学術集会で、大阪宣言2025「がんとあなたの心臓 ~Cure Cancer, Save Your Heart~」を発出し、12月には非小細胞肺癌の治療薬アミバンタマブ・ラゼルチニブ併用療法における予防的抗凝固療法の適正使用に関するステートメントをがん関連学会と合同で発出しました。この併用療法は静脈血栓症を起こすためアピキサバン2.5mgを1日2回予防投与することが添付文章で規定されました。これは、海外の臨床試験でアピキサバンが多く使用されたためと思われます。しかしアピキサバンの排泄トランスポーターには遺伝的多型があり日本人は血中濃度が高くなり、がん関連静脈血栓症に対するアピキサバン5mgの臨床試験は出血が多くて中止になりました。アピキサバン2.5mgの日本人がん患者での安全性が確認されないまま、添付文書に記載されました。この点を注意喚起したわけです。がん治療における血栓症予防ですので、本学会が主導して発出できたことは意義が大きいと考えます。

学会の発展のために国際化も進めています。過去の学術集会でAlexander Lyon先生、Javid Moslehi先生、Anne Blaes先生など多くの先生を招聘してきました。今年は佐瀬一洋先生のご尽力で、国際腫瘍循環器学会(IC-OS)の前理事長Susan Dent先生と現理事長のMichael Fradley先生の招聘が決まり、Lyon先生も再来日されます。このような機会に海外の研究者と協力・信頼関係を醸成し、わが国の腫瘍循環器学の発展につなげたいと思います。若い先生の海外留学の機会が広がると良いと思います。さらに、佐瀬一洋先生のご尽力で、本学会のメンバーが中心となりIC-OSのJapan Chapterを作り、2027年のGCOSを日本に招致することが決まりました。一段とJOCSの国際的ステータスがあがります。未入会の方はIC-OSにも入会してはいかがでしょうか？

世界の研究者に情報発信するため、英語版のホームページも構築しました。作成にご尽力いただいた委員会の皆様に感謝します。海外の研究者が自らJOCSの学術集会に参加するようになりたいものです。

抗悪性腫瘍薬治療による心血管系障害は治療中ばかりでなく、治療終了後のサバイバーにとっても大きな問題です。がん治療医は治療中は注意しても治療終了後は関心が薄れる場合が多いようです。がん治療医の意識改革が必要です。また、長期フォローアップには看護師さんの役割も重要です。超音波検査などでは臨床検査技師さんの役割も重要です。今後は看護師さんや検査技師さんへの働きかけも強化したいと思います。さらに、長期フォローアップには地域のかかりつけ医の協力を得ることも有用と思います。

まだまだ患者さんのためにやるべきことは沢山あります。皆さまのさらなるご協力をお願いします。

GCOS2027 Tokyo 開催について

2027年10月22-24日、第13回国際腫瘍循環器学会学術集会 (The 13th Global Cardio-Oncology Summit: GCOS2027、会長 小室一成) が東京大学で開催されます。GCOSは国際腫瘍循環器学会 (International Cardio-Oncology Society: IC-OS) が主催する、腫瘍循環器学領域における世界最大規模の国際学術集会です。2015年の第1回開催以来、欧米を中心に発展を続けてきましたが、日本開催は今回が初めてであり、さらにアジア太平洋地域においても初開催となります。

近年、がん治療の進歩によって多くの患者が長期生存できるようになりました。一方で、抗がん薬、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害薬、放射線治療などによる心血管障害 (CTR-CVT: Cancer Therapy-Related Cardiovascular Toxicity) が新たな世界的課題となっています。「がんは治療できても、心血管障害によって生活の質や生命予後が損なわれる」という問題に対し、循環器内科医、腫瘍内科医、看護師、薬剤師、リハビリテーションスタッフなど多職種が連携して取り組む必要性が高まっています。腫瘍循環器学は、まさにその課題に応える新しい学際領域です。

GCOS2027のメインテーマは、「循環器とがん治療の新しい未来を切り拓く: アジア太平洋地域からの提言」です。欧米とは異なる人口構造、医療制度、民族差を有するアジア太平洋地域から、がんサバイバーシップ時代における新しい医療モデルを世界へ発信したいと考えています。特に日本は、超高齢社会、国民皆保険制度、豊富なリアルワールドデータを有しており、腫瘍循環器学の発展において大きな役割を果たすことが期待されています。

本学術集会では、がん治療開始前のリスク層別化、心血管毒性の予防と管理、サバイバーシップケア、性差・民族差、AIやデジタルヘルスの活用、リアルワールドデータ解析、患者市民参画 (PPI) など、多岐にわたるテーマについて議論を行います。また、若手研究者育成にも力を入れ、JOCS-NEXTやIC-OS NEXT GENと連携した国際交流プログラム、トラベルグラントなどを通じて、次世代リーダー育成を推進します。

さらに本会議は、第10回日本腫瘍循環器学会学術集会 (JOCS2027) との同時開催となります。日本腫瘍循環器学会は創立10周年という節目を迎えますが、この10年間で我が国における腫瘍循環器診療、多職種連携、人材育成、ガイドライン整備は大きく発展してきました。その成果を世界へ発信するとともに、世界の最先端の知見を日本へ還元する絶好の機会になると考えています。

GCOS2027 Tokyoが、日本のみならずアジア太平洋地域における腫瘍循環器学発展の転換点となり、がん患者さんの治療継続、生命予後、QOL向上につながることを期待しています。日本腫瘍循環器学会会員の皆様には、ぜひ本学術集会に積極的にご参加いただき、世界に向けて日本の腫瘍循環器学を発信していただければ幸いです。

最後になりましたが、GCOS2027の招致ならびに開催準備にご尽力いただいております、日本腫瘍循環器学会理事長・GCOS2027副大会長の南博信先生、GCOS2027準備委員長の佐瀬一洋先生、JOCS2027会長の竹石恭知先生をはじめ、国内組織委員会の先生方、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

執筆者: 小室 一成

国際医療福祉大学大学院・教授、東京大学・名誉教授
東京大学大学院医学系研究科先端循環器医科学特任教授



&



第9回日本腫瘍循環器学会学術集会 開催のお知らせ

- 会期：** 2026年9月5日（土）～6日（日）
会場： 順天堂大学 本郷・御茶ノ水キャンパス
会長： 佐瀬 一洋 （順天堂大学大学院医学研究科臨床薬理学）
副大会長： 高久 智生 （埼玉医科大学医学部血液内科学）
事務局長： 宮崎 彩記子 （順天堂大学大学院医学研究科循環器内科学）
 大津 洋 （順天堂大学健康データサイエンス学部）
詳細： <https://jocs2026.umin.jp>
 Email: jocs2026@macc.jp

ごあいさつ

本大会（JOCS2026）は学会創設10周年となる次回大会（JOCS2027）およびアジア太平洋地域初開催となる国際腫瘍循環器サミット（GCOS2027）に向けた重要なマイルストーンです。裾野を広げる教育セッションから前線を進めるシンポジウムまで、多くの参加者にご満足いただけるプログラムをご用意すべく鋭意準備を進めています。

今回のテーマは「腫瘍循環器学は仁術（JIN and the Art of Cardio-Oncology）」です。近年のがん医療の進歩は極めて目覚ましく、がん患者の予後が劇的に改善する一方、がん治療関連心血管疾患（CTR-CVT）という多様かつ複雑な病態が顕在化し、循環器疾患の既往を有するハイリスク患者に対するがん治療の完遂という新たな臨床的課題への対応が求められています。こうした中で「仁」すなわち他者への思いやりや協働の精神と、「術」すなわちそれぞれの専門性に裏付けられた教育・診療・研究により、腫瘍循環器学という新しい学際領域における多職種連携や国際連携の推進を期待します。

今年のみどころの一つは国際腫瘍循環器学会（IC-OS）とのコラボレーションです。乳腺腫瘍内科医でIC-OS前理事長のレジェンドSusan Dent先生（Rochester大学）、Yale大学／Johns Hopkins医学部／Harvard大学 MGH循環器内科と

いうエリートながら親しみやすい人柄のIC-OS新理事長 Michael Fradley先生（Pennsylvania大学）、そしてご存じESC2022腫瘍循環器診療ガイドラインの筆頭著者でIC-OS理事のAlexander Lyon先生（Imperial College London）といった世界のトップリーダー陣を東京にお招きし、国際共同研究やガイドラインの国際調和を見据えて熱く語り合うセッションを多数企画しています。



一方、これから腫瘍循環器学を学ぼうという若い先生方、そしてチーム医療や地域医療連携の最前線でご活躍されている看護師・薬剤師・臨床検査技師・理学療法士等の皆さまに向けた教育セッションも充実しています。教材にはJOCsガイドライン委員会、編集委員会、そして教育研修委員会の各委員会によるガイドライン、診療ハンドブック／実践トレーニング、あるいはWebinar等が含まれ、日常業務ですぐに役立つヒントが満載です。

その他、若手会員によるJOCs-NEXTセッション、行政・企業・アカデミアが一堂に会するタウンホールミーティング、そして患者アドボケート企画や市民公開講座など、多彩な企画を準備しております。第1回大会（JOCs2018）以来久しぶりとなる東京での対面開催であり、順天堂大学本郷・御茶ノ水キャンパスにて、皆さまとお会いできますことを心より楽しみにしております。

第9回日本腫瘍循環器学会学術集会 会長
佐瀬 一洋
（順天堂大学大学院医学研究科臨床薬理学）

第8回学術集会開催のご報告

第8回日本腫瘍循環器学会学術集会は2025年10月25日（土）・26日（日）の2日間大阪で初めて開催されました（図1）。また、2025年は大阪・関西万博2025が大阪夢洲で開催された記念の年でもあり1970年日本で初めて万博（大阪万博EXPO' 70）が開催された千里丘陵にある千里ライフサイエンスセンターを学会会場として選び、「Continuity and Change 不易流行、がんと循環器：古くて新しい関係」を学会のテーマといたしました。向井去来らの俳論として知られる「不易流行」は、新しみを求め変化する事（流行）は永遠に変化しない本質がある（不易）。つまり、変わらない価値観を大切にしながら変化を恐れずに柔軟に対応していくという意味があります（精選版 日本国語大辞典 第二版、デジタル大辞泉より）。現在の腫瘍循環器診療は「不易流行」の世界にあり、アントラサイクリン心筋症のように古くから存在する心血管合併症に対応する一方で次々出現する新しいがん治療に伴う未知なる心血管毒性に対してエキスパートオピニオンにより柔軟に対処する日々が続いています。そこで、今回の学術集会におけるプログラムは、第7回学術集会に続き56の「古くて新しい」セッションを企画いたしました。さらに、海外招聘講演は世界で最初にCTRCDの概念をお作りになったニューサウスウェールズ大学の根岸一明先生にご講演いただきました。また、韓国からWoo-Baek Chung先生、Mi-Hyang Jang先生においでいただき「アジア太平洋地域の腫瘍循環器学の連携」についてご議論いただきました。（図2）



図1



図2

今回の学術集会におけるもう一つのミッションは、アカデミアのみならずがん患者さん、がんサバイバーそして一般市民の皆様にご参加いただき多くの方に腫瘍循環器学を知っていただくことでした。学会開催前の10月19日に大阪国際がんセンターにおいて、市民公開講演会を「がん診療におけるがんと循環器病のかかわり（腫瘍循環器学）」をテーマとして開催しがん患者さんをはじめ多くの市民の方に集まっていただきました。会期中はPAPシンポジウム「小児・思春期世代でがん治療を受けた方のトランジション・移行期医療」において小児科医、プライマリケア医そしてがんサバイバーの皆様に参加いただき議論いただきました。その結果、学会全体では医師のみならず薬剤師、看護師、技師の皆様そして一般の市民の皆様を含めた634名の方に参加いただくことができました。

最後に、2011年に最初の腫瘍循環器外来を開設された大阪の地から「大阪宣言2025：がんとなあなたの心臓 Cure Cancer, Save Your Heart」（<https://j-onco-cardiology.or.jp/osaka-download/>）を理事長の南博信先生より発出いただきました。万博が55年ぶりに開催されて以来元気な日が続く大阪ですが、これらの流れは2026年開催の第9回学術集会へとつながり「古くて新しい」がんと循環器の関係はさらに強固となり日本腫瘍循環器学会の活動がさらに拡大していくことが期待されています。

第8回日本腫瘍循環器学会学術集会 会長
向井 幹夫
（公益社団法人 大阪府保健医療財団 大阪がん循環器病予防センター）

● 学会報告 ●

2026年度（第9期）定時社員総会兼評議員会議事録

開催日時 2025年10月25日（土）14時00分～14時50分

会場 千里ライフサイエンスセンター 5階 ライフホール

出席者社員数 総社員数844名、出席社員数519名（内訳 本人出席81名、委任状出席438名）

議長 理事長 南 博信

議題：

第1号議案：2025年度事業報告ならびに会計報告

第2号議案：2026年度事業計画（活動計画、予算計画）

報告1：今後の学術集会 第9回、第10回

議事の経過及びその結果

定刻、理事長が議長となり開会を宣した。本社員総会は定款第19条に定める定足数を満たしており、適法に成立した旨を告げ、本会議の議事録署名人に理事の岡評議員を選任し次の議題に入った。

1. 2025年度活動報告、会計報告について

(1) 活動報告

議長より、定時理事会開催、会報作成、webinar開催、患者向け啓発ポスター作成、英語版HP作成について報告した。

(2) 会員数

議長より、2025年8月31日時点での登録会員数について報告した。

(3) 会計報告

田村財務委員長より、2025年度の会計報告が行われ、石岡監事、斎藤監事の確認を得ていることを報告。本議案は承認された。

2. 2026年度事業計画（活動計画、予算計画）について

(1) 全体スケジュール

議長より、全体スケジュールについて報告された。

(2) 予算案について

田村財務委員長より、2026年度予算案を示して賛否を諮った。別段の異議なく本議案は承認された。

3. 退任理事・監事について

本総会にて退任される理事は、循環器領域から石坂信和先生・坂田泰史先生・平田健一先生の3名、腫瘍領域から大須賀穰先生・三谷絹子先生の2名、循環器および腫瘍領域から向井幹夫先生の1名、計6名と報告された。

また、退任される監事は石岡千加史先生の1名と報告された。

4. 新理事、新監事の推薦について

理事候補者として循環器領域から新潟大学の猪又孝元先生、国立がん研究センターの田尻和子先生、愛媛大学の山口修先生の以上3名、腫瘍領域から筑波大学の佐藤豊実先生、岐阜大学の津端由佳里先生の計5名が推薦された。

続いて、監事候補者として、向井幹夫先生（新任）および斎藤能彦先生（再任）が推薦され、いずれも別段の異議なく承認された。

5. 名誉会員、功労会員の推薦について
名誉会員候補者として石岡千加史先生、大須賀穰先生、平田健一先生、三谷絹子先生、功労会員候補者として植田真一郎先生、川村眞智子先生の計6名が推薦され、別段の異議なく承認された。
6. 各種委員会報告
 - (1) 広報委員会（南野委員長）
SNS運用指針の策定、ホームページ英語版、ポッドキャスト企画および会報について報告された。
ならびに、医師向けコンテンツ作成企業との連携について検討を進めている旨報告された。
 - (2) 総務委員会（岡委員長）
評議員被推薦者の推薦形式について標準化を図るために申請書を整備したこと、会員登録システムの更新に伴い一部項目が追加され、会員管理費が増額されることが報告された。
続いてJOCS/JSMO合同ステートメントの進捗について報告され、最後に会員数の現状が共有された。
 - (3) 編集委員会（照井委員長）
腫瘍循環器診療ハンドブック改訂第2版の出版について報告された。
 - (4) 教育研修委員会（泉委員長ご欠席のため田尻幹事）
IC-OS Japan Chapterのwebinarの進捗、ハンドブック改訂に伴う教育Webセミナーの刷新検討について報告された。これに関連して、公募型教育プロジェクト助成金の活用方針が共有された。
 - (5) ガイドライン作成委員会（矢野委員長）
Onco-Cardiologyガイドライン補遺版作成について、日本腫瘍循環器学会と日本臨床腫瘍学会共同で行う旨が報告され、併せて委員のメンバーと進行状況について説明が行われた。
 - (6) 国内交流委員会（向井委員長）
2025年度事業報告および2026年度事業計画が示され、これまでに実施した共催企画の状況について報告された。
 - (7) 国際交流委員会（佐瀬委員長）
GCOS2027（東京開催）の開催について報告された。
 - (8) 学術委員会（辻田委員長ご欠席のため高橋幹事）
学術集会プログラムの持続的運営を図るための取り組みについて報告された。続いて、学会誌刊行準備に向けたワーキンググループを設置する方針が理事会にて承認された旨、学術集会Awardにかかる規程整備を進める旨が報告された。
最後に、アミバンタマブ／ラゼルチニブに関する臨床研究支援を行う方針が示された。
 - (9) ダイバーシティ推進委員会（坂東委員長）
委員会名称の変更およびJOCS-NEXTの発足ならびに活動状況について述べられ、これに伴い委員会規則の改定を行う旨が報告された。
 - (10) 保険委員会（保田委員長ご欠席のため向井理事）
公知申請やGLS加算請求への対応について進捗が報告され、臨床研究環境整備や内保連参画の準備状況が共有された。あわせて、市民公開講座の開催予定が報告された。
 - (11) 財務委員会（田村委員長）
委員会の活動報告が行われ、新規事業が計画された際の予算の補正について案内された。
 - (12) 医療倫理委員会（木村委員長）
特段の報告は無し。

- (13) 利益相反委員会（竹石委員長）
特段の報告は無し。

7. 今後の学術集会

- (1) 第9回学術集会（佐瀬一洋会長）

佐瀬第9回学術集会会長より、2026年9月5日、6日に順天堂大学本郷・御茶ノ水キャンパスにて開催される第9回学術集会について報告された。続いて、学術集会テーマが「腫瘍循環器学は仁術」に決定した旨周知された。

- (2) 第10回学術集会（竹石恭知会長）

竹石第10回学術集会会長より、2027年10月22日～24日に東京大学伊藤国際学術研究センターにて開催される第10回学術集会について報告された。

● 学会報告【国際交流】 ●

南アフリカでのGCOS2025を終えて

2025年10月31日～11月1日、南アフリカ・ケープタウンのCentury City Conference Centreにて、GCOS (Global Cardio Oncology Summit)2025が開催されました。本サミットはIC-OS（国際腫瘍循環器学会）が主催する国際学術集会であり、アフリカ大陸での開催は今回が初めてです。

会場のケープタウンは1967年に世界初の心臓移植手術が行われた歴史的な地です。飛行機から見るとアフリカ大陸らしい赤土の平原が広がっていましたが、ケープタウン中心部は高層ビルが立ち並ぶ大都会でした。10月末は快晴が続き湿度も低く過ごしやすい一方、気温は30度近くまで上がり屋外では汗ばむほどの陽気でした。

学会冒頭では、南アフリカ人医師Alexia Oliver先生が「MD as the Patient」と題した講演を行いました。医学部学生時代に悪性リンパ腫を発症し、重症なCTRCD（がん治療関連心機能障害）を経験された先生自身の、医療者でありながら患者側の苦悩も経験したエピソードは非常に心を揺さぶるものがあり、幕開けから腫瘍循環器の原点を再確認することができました。

プログラムはがん種別マネジメント、CTRCDに対する薬剤の最新エビデンス、アフリカ各国の腫瘍循環器の現状など多岐にわたりました。アフリカ各地の報告では循環器医師への地理的アクセスが限られる地域や放射線治療が受けられない国の現実が示され、腫瘍循環器において国ごとで抱える課題が大きく異なることを実感しました。日本からの発表では、がんサバイバーにおけるアントラサイクリン毒性と心筋症関連遺伝子変異との関連について東京大学循環器内科の吉田浩紀先生がYoung Investigator Awardを受賞されました。改めて、吉田先生、おめでとうございます！！

コーヒープレークは30分程度と長めに設定され、参加者同士が自然と交流できる雰囲気でした。ポスター会場とケータリングが同じ空間に設けられ、カクテルを片手にネットワーキングも兼ねた和やかな時間となりました。

今年のGCOS2026はアメリカ・ウィリアムズバーグ（バージニア州）、GCOS2027はアジア初として東京開催が決定しています。日本の腫瘍循環器が臨床・研究の両輪で世界に発信できる場となるよう、東京開催の成功に向けて尽力していきたいと思います。



写真1：とても寒かったメイン会場



写真2：ポスター会場も大盛況でした

執筆者: 今岡 拓郎

国立がん研究センター東病院 循環器科

〒277-8577 千葉県柏市柏の葉6丁目5-1

TEL: 04-7133-1111

E-mail: timaoka@east.ncc.go.jp

● 学会報告【国内交流】 ●

日本臨床薬理学会：第46回学術集会

ジョイントシンポジウム 7：

「今押さえておきたい！腫瘍循環器学の最新動向」の報告

2025年12月5-6日にステーションコンファレンス東京で開催された第46回日本臨床薬理学会学術集会では、日本腫瘍循環器学会とのジョイントシンポジウム「今押さえておきたい！腫瘍循環器学の最新動向」が開催され、木田圭亮先生（聖マリアンナ医科大学）と大倉裕二先生（新潟県立がんセンター）の軽妙な司会のもと、免疫療法関連心筋炎、アントラサイクリン心筋症、がん関連血栓症、シクロホスファミド心毒性など、腫瘍循環器学の最前線に関する活発な議論が行われた。会場は満員で立ち見が出る状態であった。

土岐典子先生（がん・感染症センター都立駒込病院）は、「シクロホスファミドによる心毒性の病態と機序」について講演された。近年、ハプロ移植の普及に伴い、移植後大量シクロホスファミド（PTCy）の使用機会が増加している一方、高用量シクロホスファミドによる重篤な心毒性への注意喚起がなされた。特に代謝産物acroleinによる酸化ストレスや細胞障害機序について整理され、血液腫瘍領域における循環器管理の重要性が改めて示された。

田尻和子先生（国立がん研究センター東病院）は、「免疫チェックポイント阻害薬関連心筋炎」について解説された。免疫チェックポイント阻害薬（ICI）は多くの悪性腫瘍で治療成績を大きく改善した一方、致死的な免疫関連有害事象（irAE）としての心筋炎が重要課題となっている。ICI心筋炎は発症頻度こそ低いものの、致死率が高く、早期診断と迅速な治療介入が不可欠である。トロポニン上昇や心電図異常の重要性、左室駆出率が保たれていても重症化し得る点など、実臨床に直結する内容が示された。また、重症筋無力症や筋炎を合併する症例への注意点も共有され、多診療科連携の必要性が強調された。

筆者は、「がん治療関連血栓症の一次予防：Ami+Laz時代のDOAC予防投与をどう捉えるか」と題して講演を行った。EGFR遺伝子変異陽性非小細胞

肺癌に対するアミバンタマブ+ラゼルチニブ併用療法では高率に静脈血栓塞栓症（VTE）が発症することが報告されており、DOACによる一次予防が新たな課題となっている。AVERT試験やCASSINI試験などのエビデンスを踏まえつつ、Khoranaスコアを用いたリスク層別化の重要性や、出血リスクとのバランスを考慮した選択的予防戦略について議論した。

さらに大倉裕二先生は、「アントラサイクリン心筋症の予防戦略をめぐる国際的論争とわが国における課題」について講演された。近年はトロポニンや心エコーを用いた早期発見・早期介入戦略が普及している一方、欧米では過剰診断や費用対効果を懸念する議論も高まっている。ESCガイドライン以後の国際的論争を俯瞰しつつ、わが国における課題や今後の方向性が示され、腫瘍循環器学が成熟期に入りつつあることを感じさせる内容であった。

質疑応答は医師のみならず様々な職種を交えて活発に行われた。最後に佐瀬一洋先生（順天堂大学）から総合コメントおよび2026年の第9回日本腫瘍循環器学会学術集会についての紹介があった。

本シンポジウムを通じ、腫瘍循環器学は「循環器毒性への対処」から、「がん治療を支える個別化医療・リスク管理」へと大きく進化していることが示された。今後は循環器医、腫瘍内科医、血液内科医、薬剤師、看護師などによる多職種連携をさらに深化させ、実臨床に基づく本邦からのエビデンス創出を進めていくことが重要であると考えられた。

執筆者：小坂橋 紀通

群馬県立心臓血管センター 循環器内科

〒371-0004 群馬県前橋市亀泉町甲3-12

TEL: 027-269-7455

E-mail: norikoitabashi@gmail.com



施設紹介 No.7

利根中央病院循環器センターの紹介

山間地域の中規模急性期病院における腫瘍循環器外来立ち上げの取り組み

当院は群馬県沼田市に位置する253床の地域一般病院です。県内面積の4分の1を占める広大な二次医療圏の北部山間部に位置し、その唯一の総合病院として地域医療を担っています。利根郡および沼田市、約9万人の医療圏は過疎化・高齢化が著しく進んでおり、最寄りのがん専門病院は遠方にあります。高齢者を中心に長距離通院が困難な患者さんが少なくなく、当院でがん治療を受ける方が多いのはこうした地域の実情によるものです。

転機となったのは、免疫チェックポイント阻害薬（ICI）投与後に心筋炎を発症した症例を経験したことでした。循環器内科としてがん治療に伴う心血管毒性へ組織的に対応する必要性を痛感し、腫瘍循環器診療の立ち上げを決意しました。

2024年4月に腫瘍循環器外来を開設するにあたり、まず院内紹介システムの構築に取り組みました。アントラサイクリン系抗がん剤、抗HER2薬、ICIを使用する患者さんについては、治療開始前に全例当科へ紹介する運用を各診療科と取り決めました。当院規模であれば対象患者の絶対数が限られるため、こうした全例紹介が現実的に運用できます。大規模病院では診療科間の調整に時間を要することもあります。中規模病院ゆえのフットワークの軽さと患者数の規模感が、横断的な仕組みをスピーディに動かせた一因であったと感じています。

同年10月には腫瘍循環器リハビリテーション（CORE）を開始しました。がん治療による心機能低下や体力減退に対し、心臓リハビリテーションの手法を応用しながら、理学療法士・看護師・管理栄養士が連携する多職種体制を整えました。

外来を続けるなかで、近隣の医療機関でがん治療を受けがん治療関連心機能障害を発症した患者さんが当院を受診されるケースも見られるようになっていきます。山間部という地理的制約のなかで、こうした患者さんを早期に把握し適切につなぐ地域連携の仕組みを、今後の重要課題として取り組んでいきたいと考えています。

がん専門病院でなくとも、山間の地域中規模病院だからこそ担える腫瘍循環器診療の役割があると考えています。一方で、経過観察の方法や異常所見への対応など、現在の取り組みが本当に最善であるのか、悩みは尽きません。まだデータも経験も乏しく試行錯誤の日々ですが、他施設の実践に学びながら、学会を通じて全国の先生方と知見を共有し、より良い診療の実現を目指していきたいと思います。



山口 実穂

利根中央病院循環器センター医長

群馬県沼田市沼須町910-1

TEL: 0278-22-4321 FAX: 0278-22-4393

E-mail: mihoyama23@gmail.com

施設紹介 No.8

NTT 東日本関東病院 薬剤部の紹介

薬剤師がつなぐ、アントラサイクリン系抗がん薬開始前の腫瘍循環器連携

NTT東日本関東病院は、東京都品川区に位置する594床の地域がん診療連携拠点病院です。当院では、血液腫瘍や乳がんをはじめとした多くの診療科で、アントラサイクリン系抗がん薬を含むがん薬物療法が行われています。当院では、近年のがん薬物療法の進歩により治療成績が向上する一方で、高齢化に伴い併存症を有する患者も増えており、治療を安全に継続するための多職種連携体制が求められてきました。

当院では2019年より、がん薬物療法における多職種連携の一環として、アントラサイクリン系抗がん薬を使用する患者に対し、心エコーなどのベースライン検査を行い、循環器内科へ相談するフローチャートを運用してきました。当初は対象患者を広く循環器内科へコンサルトする体制でしたが、患者数が増える中で循環器内科医の負担が課題となりました。一方で、心血管毒性リスクの高い患者を見逃さず、限られた医療資源の中で効率的に循環器内科へつなぐ仕組みも必要でした。

そこで当院では、2024年6月より、薬剤師がレジメン鑑査時にアントラサイクリン系抗がん薬開始前の心血管毒性リスク評価を行う新たなフローチャートに改訂しました(図1)。本フローでは、HFA-ICOSスコアを参考に、年齢、心血管疾患の既往、LVEF、NT-proBNP、高感度トロポニンT、併存症などを評価項目とし、当院の過去症例や日常業務での実用性を踏まえて評価基準を調整した各項目を点数化して、リスクを判定しています(図2)。高リスクと判定した場合には、薬剤師が循環器内科医へカルテメールで報告し、必要に応じて診療方針やフォロー体制を検討する体制としました。

この取り組みの特徴は、主治医と循環器内科医を薬剤師がつなぐ点にあります。薬剤師はレジメン鑑査の過程で対象患者を確実に把握できるため、標準化された方法で高リスク患者を抽出できます。この

新フロー導入後10か月間では、評価した50例中19例が高リスクに該当しました。高リスク患者の循環器内科コンサルト率は67%から100%に上昇し、低リスク患者のコンサルト率は64%から0%に減少しました。これにより、高リスク患者を漏れなく循環器内科へつなぎつつ、低リスク患者への不要なコンサルトを減らすことができました。

今後は、アントラサイクリン系抗がん薬による治療終了後、一定期間後の心エコーフォローについても、DXを活用しながら標準化を進めていく予定です。腫瘍循環器診療は多職種の連携によって成り立ちます。当院の取り組みはまだ発展途上ですが、各職種が専門性を活かしてリスクを拾い上げ、安全ながん薬物療法の継続に貢献していきたいと考えています。

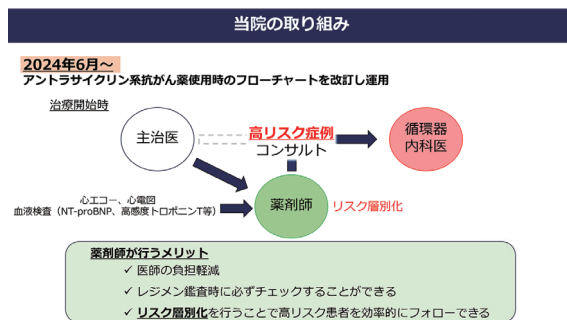


図1 アントラサイクリン系抗がん薬使用時の当院における連携フロー

薬剤師によるリスク層別化

テンプレート名: アントラサイクリン系薬剤心血管毒性リスク評価

年齢	歳	→65以上: 02点
身長	cm	
BMI	kg/m ²	→30を超える: 01点
<検査値>		
LVEF	%	→55以下: 010点
eGFR	ml/min/1.73m ²	→60未満: 01点
NT-proBNP	pg/mL	→125を超える: 01点
血清トロポニンT	ng/mL	→0.04を超える: 01点
<既往歴・併存症等>		
心血管疾患の既往歴	○有り ○無し ○不明	→有り: 10点
高血圧 (又は降圧薬の内服)	○有り ○無し ○不明	→有り: 1点
糖尿病 (又はHbA1c>7.0%)	○有り ○無し ○不明	→有り: 1点
喫煙歴	○有り ○無し ○不明	→有り: 1点
合計点数	点	04点以上 03点以下

図2 薬剤師によるアントラサイクリン系薬剤心血管毒性リスク評価テンプレート

兼平 暖、中村 純平

NTT東日本関東病院 薬剤部

〒141-8625 東京都品川区東五反田5丁目9-22

TEL: 03-3448-6111 (代表)

FAX: 03-3448-6165

E-mail: dan.kanehira.pa@east.ntt.co.jp

● 学会委員会紹介 ●

学術委員会の活動について

日本腫瘍循環器学会における学術委員会は、腫瘍循環器学（Cardio-Oncology）の学術的発展とエビデンス創出を推進する中核的役割を担っている。腫瘍循環器学は、がん治療の進歩に伴って顕在化してきた心血管合併症に対応するために発展してきた比較的新しい学際領域であり、近年ではがんサバイバーの増加や治療の長期化を背景に、その重要性はますます高まっている。

本委員会では、こうした社会的・医療的ニーズを踏まえ、①多施設共同研究の推進、②研究基盤の整備、③学術情報発信体制の強化、④人材育成を柱として、多面的な学術活動に取り組んでいる。

① 多施設共同研究の推進

本領域では単施設での症例集積に限界があることから、質の高いエビデンス創出には施設横断的な連携体制が不可欠である。学術委員会では、研究課題の公募の他、研究計画のブラッシュアップ支援、研究デザインや統計解析に関する助言、倫理審査体制やデータマネジメント体制構築への支援など、研究立案から実施、成果発信に至るまで包括的なサポート体制の構築を進めている。さらに、研究支援に資する内容かどうかを委員会でレビューし、研究者へフィードバックを行う仕組みについても検討を進めており、研究の質の均てん化と効率的な研究推進を目指している。また、国内外の研究動向を踏まえたレジストリ構築やリアルワールドデータの活用も重要な課題である。臨床現場で得られるデータを体系的に収集・解析することで、日本発のエビデンス創出につなげるとともに、国際的な情報発信力の強化を図る必要がある。本委員会では、厚生労働科学研究事業とも連携し、がん診療医、循環器医、脳卒中医、がん患者を対象とした全国的なアンケート調査を実施している。これにより、腫瘍循環器診療における医療提供体制や人材育成上の課題を明らかにし、今後の政策提言や診療体制整備につなげることを目指している。

② 研究基盤の整備

学術基盤強化の一環として、学会誌刊行に向けた準備を進めている。本領域の学術的発展を見据え、学会誌の形式、査読体制、発行頻度、掲載内容などについて検討を行っている。また、海外学会誌との連携可能性についても議論を進めており、国際交流委員会と協力しながら検討を行っている。

③ 学術情報発信体制の強化

学術集会の規模拡大や学際的連携の重要性が高まる中、委員会機能の見直しにも取り組んでいる。従来の学会誌刊行や広報活動に加え、学術集会プログラムの企画・構成への貢献についても検討を進めている。大会長ごとの運営負担軽減や、継続性のある企画体制の構築を見据えた議論を行っている。

④ 人材育成

若手研究者の育成は、本委員会の重要な使命の一つである。

研究立案や論文作成に関する教育的支援に加え、共同研究への参画機会の提供や、学術集会でのAward授与、学会支援研究事業の認定制度などを通じて、研究活動の活性化を図っている。これにより、次世代を担う研究者を育成し、臨床と研究を両輪とした持続可能な学術基盤の確立を目指している。

今後は、個別化医療の進展や新規がん治療の多様化に対応するため、より精緻なリスク層別化や予防・介入戦略の確立が求められる。その実現には、質の高い臨床研究の継続的な実施と、分野横断的な連携のさらなる強化が不可欠である。学術委員会としては、会員の研究活動を支えるプラットフォームとしての機能を一層充実させ、本学会の学術的プレゼンス向上と、腫瘍循環器医療の発展に貢献していきたい。

執筆者：山本 正啓¹，辻田 賢一²

1 熊本大学病院 循環器内科 心臓リハビリテーション
寄附講座 特任助教

2 熊本大学病院 循環器内科 教授

〒860-8556 熊本市中央区本荘1-1-1

TEL: 096-373-5175 (医局)

E-mail: yamamo-m@kumamoto-u.ac.jp

● JOCS-NEXTの歩みと切り拓く未来 ●

JOCS-NEXTは、日本腫瘍循環器学会 若手の会として、「腫瘍循環器診療がすべてのがん患者にとって当たり前の医療となる社会の実現」をビジョンに掲げ、教育・研究・広報・国際交流の4つの柱を中心に活動しています。多職種・多施設による強固なネットワークを基盤に次世代の腫瘍循環器診療を担う人材育成と学術活動の推進を目指しています。

発足当初から活動の輪は着実に広がり、現在では130名を超えるメンバーと60を超える施設が参加しています。がん診療医、循環器内科医、薬剤師に加え、看護師や理学療法士など多様な職種が参画しており、全国各地で腫瘍循環器医療の発展に取り組んでいます。

教育グループでは、若手医療従事者が実践的に学べる機会の創出に力を注いでいます。2026年6月6日には「腫瘍循環器道場2026」を開催し、スタッフを含む37名が参加しました。心エコーレポートの読み方から、がん種別ごとの心毒性評価まで、4症例を用いたグループディスカッション形式で学びを深めました。本企画の内容は今後Web配信を予定しており、より多くの医療従事者へ学習機会を提供していく予定です。

研究グループではアントラサイクリン系抗がん剤によるがん治療関連心機能障害（CTRCD）を対象とした後ろ向き多施設共同研究「ALIGN study」を立ち上げました。全国約40施設の参加を予定しており、わが国における腫瘍循環器診療の実態把握とエビデンス創出への貢献が期待されています。

広報グループでは、XをはじめとするSNSを活用し、最新の論文、ガイドライン、学会情報を継続的に発信しています。また、公式ホームページの公開により、活動内容を広く共有し、腫瘍循環器学の認知向上に努めています。

国際交流グループでは欧州心臓病学会のCardio-Oncology Young Community（ESC COOL）の若手会とも連携を開始しました。今後は国際学会での交流や情報交換を進めるとともに、国際共同研究への発展も視野に入れています。

また、学術的成果も着実に蓄積されており、JOCS-NEXT主導で実施した薬剤師を対象とする全国調査研究の成果は、2026年6月に Circulation Reports に採択されました。今後も多職種・多施設連携を基盤に、腫瘍循環器領域におけるエビデンス創出と学術発信を推進してまいります。

9月に開催される第9回日本腫瘍循環器学会学術集会ではJOCS-NEXTによる3つの特別セッションを予定しています。がん診療医、循環器内科医、薬剤師、看護師それぞれの立場から、腫瘍循環器診療の未来について活発な議論を展開する予定です。

最後になりましたが、JOCS-NEXTの活動は、日本腫瘍循環器学会の先生方のご理解とご支援、そして事務局の皆様の多大なるご協力によって支えられています。この場をお借りして心より御礼申し上げます。今後も若手ならではの柔軟な発想と行動力を生かし、腫瘍循環器診療のさらなる発展と普及に貢献してまいります。

執筆者：中村 葉奈¹、今岡 拓郎²

1 京都大学大学院医学研究科 循環器内科学

2 国立がん研究センター東病院 循環器科（医員）

〒606-8507 京都府京都市左京区聖護院川原町54

TEL: 075-751-3111 FAX: 075-751-6151

E-mail: kannagon1004@gmail.com



● 役員名簿 ●

理事長	南 博信	(神戸大学大学院医学研究科)
副理事長	桑原 宏一郎	(信州大学医学部)
	佐瀬 一洋	(順天堂大学大学院医学研究科)
理事	阿古 潤哉	(北里大学医学部)
	安斉 俊久	(北海道大学大学院医学研究院)
	家田 真樹	(慶應義塾大学医学部)
	池田 正孝	(兵庫医科大学)
	泉 知里	(国立循環器病研究センター)
	猪又 孝元	(北里大学北里研究所病院)
	岡 亨	(埼玉県立がんセンター)
	絹川 弘一郎	(富山大学大学院医学薬学研究部)
	木村 晋也	(佐賀大学医学部)
	笹野 哲郎	(東京科学大学大学院医歯学総合研究科)
	佐田 政隆	(徳島大学大学院医歯薬学研究部)
	佐藤 豊実	(筑波大学医学医療系)
	清水 千佳子	(国立国際医療研究センター)
	竹石 恭知	(福島県立医科大学)
	田尻 和子	(国立がん研究センター東病院)
	田村 研治	(島根大学医学部附属病院)
	辻田 賢一	(熊本大学大学院生命科学研究部)
	津端 由佳里	(岐阜大学大学院医学系研究科)
	照井 康仁	(埼玉医科大学)
	中村 真潮	(陽だまりの丘なかむら内科)
	野出 孝一	(佐賀大学医学部)
	坂東 泰子	(三重大学大学院医学系研究科)
	南野 徹	(順天堂大学大学院医学研究科)
	保田 知生	(CVLアトラ新町クリニック)
	矢野 真吾	(東京慈恵会医科大学)
	山口 修	(愛媛大学大学院医学系研究科)
監事	斎藤 能彦	(奈良県立病院機構奈良県西和医療センター)
	向井 幹夫	(大阪がん循環器病予防センター)
幹事	今村 善宣	(福井大学医学部附属病院がん診療推進センター)
	塩山 涉	(滋賀医科大学)
	高橋 雅信	(山形大学大学院医学系研究科)
事務局長	赤澤 宏	(金沢医科大学総合医学研究所)

● 編集後記 ●

このたび、広報委員に加えていただいた、がん研有明病院乳腺内科の高野利実と申します。

私は腫瘍内科医ですが、主流というよりは端っこを歩んできたこともあり、他分野の皆様から声をかけられることが多く、「人とつながり」や「新しいもの」が好きだという私の性格もあいまって、様々な「腫瘍〇〇学」「〇〇腫瘍学」(学際的腫瘍学)に関わらせていただいています。Exercise Oncology、Nutrition Oncology、Psycho-Oncology、Onco-nephrology、Stroke Oncology、Onco-Neurology、Osteo-oncology、Diabeto-Oncology、Digital Oncology、そして、Onco-Cardiology。次々と新しい学問が生まれていますが、異なる分野の専門家が会おうと、そこでは化学反応が起き、新しいムーブメントが生まれます。名前をつけることで、新しい学問分野が一気に広まるというのも実感しています。これらの動きの最先端を切り拓いているのが、腫瘍循環器学であり、他の「〇〇腫瘍学」はその背中を追いかけている状況です。今後も、Onco-Cardiologyには、学際的腫瘍学のトップリーダーとして、新しい景色を見せてくれることを期待しています。

学際的腫瘍学の醍醐味は、境界線を乗り越えて、人間どうしがつながることにあります。専門家だけでなく、市民とのつながりも重要であり、そのための情報発信も欠かせません。患者市民参画(PPI)との親和性はもともと高いはずであり、今後、さらに市民を巻き込んだ活動を展開する必要があるでしょう。

SNSには、注意すべき点も多々ありますが、うまく活用すれば、その影響力は計り知れません。私も個人的に市民向けの発信には力を入れていて、X(@ToshimiHBM)やインスタ(toshimitakano_hbm)の発信も試行錯誤しながらやっています。市民向けのコラムや本を書くことも多く、最近では、恩師の養老孟司先生と私の対談本「『幸せ』より『居心地』のよい生き方」が出版されました。養老先生は、心筋梗塞と小細胞肺癌を患っておられますので、腫瘍循環器学ともつながる話題が展開されています。病気があっても「居心地よく」が、キーワードです。

TVドラマや映画の医療監修を務める機会も多いのですが、最近関わった映画で一番話題となっているのが、カンヌ国際映画祭で主演女優賞を受賞した「急に具合が悪くなる」です。この映画、皆様にも是非ご覧いただきたいのですが、様々な「境界」を溶かしていく映画です。国の境界、言語の境界、舞台と客席の境界、施設と社会の境界、ケアする側とされる側の境界、患者と元々人の境界、正常と異常の境界、夢と現実の境界、生と死の境界。そういった「境界」が曖昧になる中で、浮かび上がってくるのは、人間のつながりの美しさ。

腫瘍循環器学も、「がん」と「心臓」という、もともととは接点の乏しい2つの領域が出会い、その境界を溶かしながら発展しているわけですが、今後も、最も大切な「人間へのまなざし」を忘れずに、世の中に広まり、患者さんや市民の役に立つことを期待しています。

私自身、新参者の広報委員ですが、市民向けへの発信などで貢献していきたいと思っております。何卒よろしくお願い申し上げます。

広報委員 高野 利実(がん研有明病院乳腺内科)



日本腫瘍循環器学会 会報

(年1回刊行)

第7号 (2026年7月)

発行/一般社団法人 日本腫瘍循環器学会

編集/一般社団法人 日本腫瘍循環器学会事務局
(一般社団法人 学会支援機構)

● 入会案内 ●

正会員：この法人の目的に賛同して入会した個人
または団体（年会費：8,000 円）

賛助会員：この法人の目的に賛同し、この法人を
資金的に援助する個人および団体（年会費：1 口
50,000 円 口数に制限はありません）